

多様化するスノースポーツ

研究開発室
北村 安樹子

<進むスキー離れ>

今年もいよいよ年末を迎えた。スキーやスノーボードなどスノースポーツの愛好者は、本格的なシーズンを前に、各地の降雪量が気になって落ち着かない日々が続く。

そして、この時期、愛好者たち以上に降雪量が気になるのはスキー場関係者であろう。(財)自由時間デザイン協会の『レジャー白書2002』によれば、2001年におけるスキーの参加人口は1,080万人と推計されており、減少傾向に歯止めがかからない(図表1)。かつては一大ブームともなったスキーだが、経済不況や若者の娯楽の多様化などを背景に、近年ではスキー離れが進んでいる。

<スノーボードへのシフトとスキーの多様化>

スキー人口が減少しているのに対し、スノーボード人口は、微増傾向が続いている。実は、スノーボーダーが登場し始めた頃は、事故の危険性やマナーの問題などを理由にスノーボーダーのゲレンデ利用を認めないスキー場も少なくなかった。しかし、そのような状況は次第に変化している。スノーボードの滑走を全面的に認めているゲレンデは、6年前の65%から2002年では85%を占めるにいたっている(日本スノーボード協会調べ)。減少が続くスキー客を補う新しい利用客として、スノーボーダーを積極的に取り込もうとするスキー場が増加している。

スキー場にもよるが、今やゲレンデではスキーヤーとスノーボーダーの割合が半々、あるいはスノーボーダーの方が多い場合も少なくない。日本

ケーブル(株)による来場者調査においても、スノーボーダーは2001年から半数近くを占めている(図表2)。

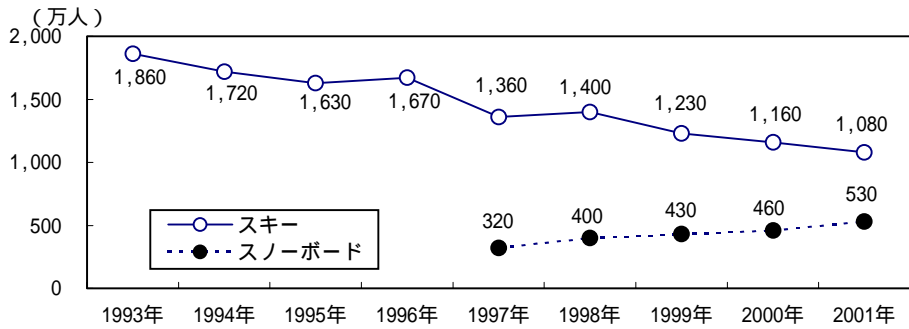
一方、スキーヤーの状況も近年様変わりしている。図表2のように、これまでのいわゆる「ふつうのスキー(ノーマルスキー)」の使用者は減少し、「カービングスキー」と呼ばれる新しいタイプの板を使用する人の方が多数派になりつつある。また、「ショートスキー」「ファンスキー」などと呼ばれる短いスキーの利用者も増加している。

<多様な用具の利用者が混在するゲレンデ>

スノーボードに関しては、愛好者が増加する一方で、スキーに比べてケガの危険性が高いという問題がかねてから指摘されてきた。実際、全国のスキー場で発生した傷害を分析した全国スキー安全対策協議会の推計によると、2002年におけるスノーボードの受傷率(スキー場総輸送人員10万人あたりの受傷者数)は14.2人で、スキーの7.8人に比べて高い値になっている(図表3)。

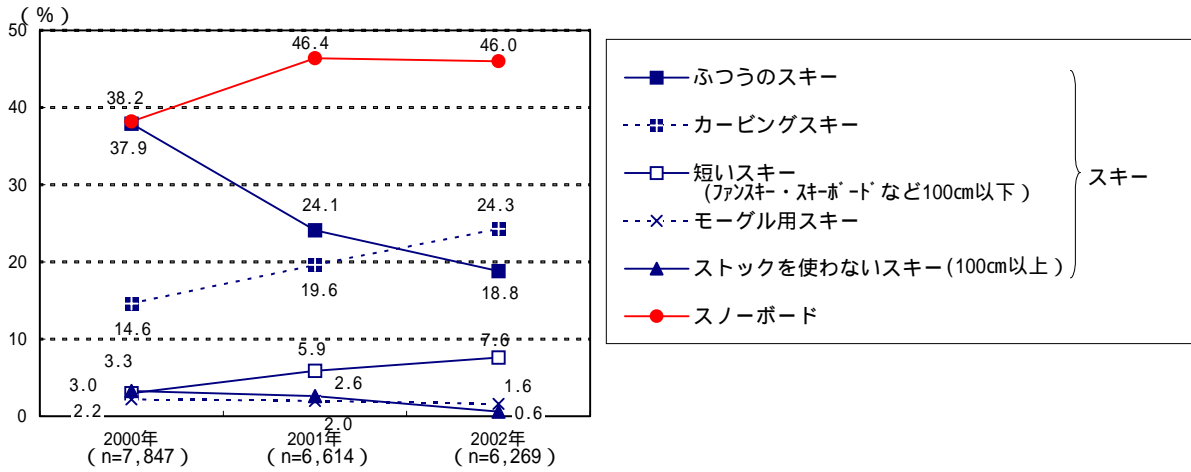
ただし、時系列でみると、スノーボードの受傷率が減少しているのに対し、スキーの受傷率は上昇している。受傷率にはさまざまな要因が関係しているとみられるが、道具の多様化が進むにつれ、新しいタイプのスキーによるケガも報告されている(図表4)。スキーの多様化は、スノーボードが登場したときと同様に、スキー場や関連用品業界にわずかながらも新しい風を呼び込んだ。スキー離れを食い止めようと、今のところは新しい用具の利用を認めるスキー場がほとんどである。しかし、多様な用具の利用者が混在するゲレンデでは、安全対策やルールの整備がいっそう重要となる。利用者もまた、新しい用具を使う際にはその危険性についても十分理解し、快適なスノーライフを楽しみたい。

図表1 スノースポーツの参加人口



資料：(財)自由時間デザイン協会 『レジャー白書2002』 2002年7月

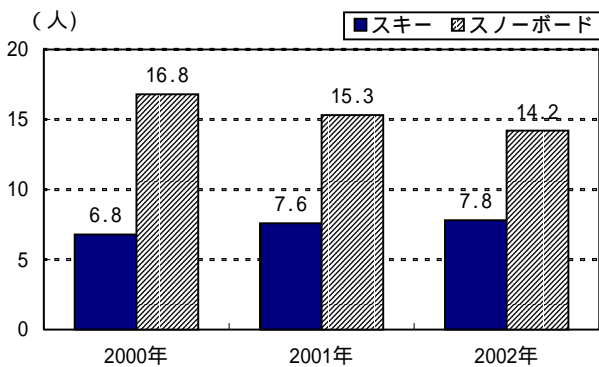
図表2 利用している用具(複数回答)



注：調査対象者は、各年2～3月の週末に全国43～48の主要スキー場に来場した男女
資料：日本ケーブル株式会社 『全国スキー場利用客アンケート調査』 2002年7月

WATCHING

図表3 受傷率の推移



注1：受傷率とは、スキー場総輸送人員10万人あたりの受傷者数
注2：調査結果は、各年2月中に全国45～46のスキー場で発生した傷害について集計
資料：全国スキー安全対策協議会 『平成13年度 スキー場傷害報告書』 2002年8月

図表4 2002年の受傷者数(用具種目別)

		件数(件)	割合(%)
スキー	ノーマル	1,165	21.8
	カービング	697	13.0
	ファン	139	2.6
	短ファン	182	3.4
スノーボード	フリースタイル	3,089	57.8
	アルペン	42	0.8
その他	そり等	29	0.5
合計		5,343	100.0

資料：図表3に同じ
注：ファンスキー；ピンディングの解放機構があり、およそ100～140cmのスキー
短ファンスキー；ピンディングの解放機構がなく、およそ100cm以下のスキー